

アテネオリンピック、体操競技の評価・判定をめぐって

加藤 澤男

1. はじめに

私は IF 派遣の審判員で鉄棒の責任担当者だった。日本の男子体操選手の力量の高さは、ここ数年来、各国が認める状況になっていた。今回の試合の流れで、私の目前で優勝が決まる可能性は大きかったが、まさにその形になった。私の気持ちは、嬉しかったのが一番目、目の前で自国の選手が鳥肌の立つような勝負の土壇場に立つ姿を見るつらさが二番目、審判員の任務以外、自国の選手に何もしてやれなかった苦しさが三番目だった。日本チームに問題は無かったのだが、今回のオリンピックは、体操競技に限らず、判定を巡るトラブルが多かったようで、この点について書くことにする。

2. 採点上のトラブル

大会を執行する側の審判員としては採点上の問題を語るの是非常に抵抗のあることだ。しかし、審判の判定について、また、体操競技というスポーツについて理解してもらいたい気持ちから書く決心をした。以下に今回起こったいくつかの実情を記す。

1) 米国の抗議

これは試合直前の公式練習中の事で日本には報道されていない。米国のある選手が、去年の世界選手権と同一の演技を行ったが、見ていた審判員が価値点を去年より低く判定した。それを見て米国チームが委員長に強く抗議してきた。委員長は、「去年と今年と同じだからという抗議は受けることができない。なぜなら、常に判定のベースになる採点規則に沿って採点活動をするのが試合であり、審判なのだ。抗議を受け入れてこの場でルールを変更することはできない」という理由だった。この返事に対して憤懣やる方のない米国はさる報道関係に漏らしたようで、人名こそ明かされなかったものの、米国大手放送局でこの憤懣が放送さ

れた。

2) ギリシャの抗議（依頼に近い）

開催国ギリシャは今回チーム出場権がなかった。これは前年の世界選手権の成績によるものだった。ギリシャは計2名の選手が出場したが、一人は個人で勝ち取った出場権であり、もう一人はIOCの権限内にあるワイルドカードで得た出場権だった。

競技 I (それぞれの決勝へ進む選手を決める予選競技) で、地元期待の個人資格を得た選手が試合の流れの中で決勝へ進むことが不可能な状況になったとき、ギリシャのさるメディア関係者から「わがホープ選手が試合の流れの中で決勝に進めなくなった。再審査をして欲しい」といった趣旨の書面を NOC を通じて正式に国際体操連盟宛に持ち込んできた。その選手に対する審判の採点は規則の範囲以内にあり、一人の申し出に対して、その選手のために再審査をすることは不可能だった。というより、試合全体を意味のないものにしてしまうことなので、申し出に応じることはできなかった。当該のメディア関係者がこの状況を新聞に載せることになったのは、試合を執行する側としては非常に遺憾なことだった。

3) 韓国の抗議

競技 II (個人総合選手権決勝) の表彰が終わり、我々技術委員も帰途につく頃、韓国チームが「我が国の選手の演技を間違って採点している」また、「米国選手の採点がおかしい」と我々に口頭で相談があった。抗議については自国の選手に対して行うのが通例であり、他国の選手にクレームを付けることは許されていないと説明し、正式に対応してもらうには書面で委員長に申し出るべきだと対応した結果、その後、書面で抗議が提出された。IF はこれを受けて当該審判を呼び、確認した結果、その審判が自分のミスであることを認めた。恣意的でないことは分かったにせよ、間違いは間違いであり、IF の会長以下大変困った状況に陥った。

審議の結果、「すでに表彰を終えたその順位は変えない。間違いを起こした3人の審判はそれ以降、任務に就かせない」という結論を韓国に返した。しかし、メダルの種類が変わる可能性のある点で韓国、とりわけ NOC、は納得せず、CAS に提訴する結果になった。

4) その他のトラブル

以上のトラブル以外にも問題はあった。競技 III (種目別選手権鉄棒の決勝) で、私が担当する鉄棒で、アレクセイ・ネモフ選手の採点に対して観客の大ブーイングがおさまらず、試合を中断せざるを得ない状況が起こった。担当責任者として、私は採点規則の範囲内にある各壘審の採点にクレームを付けることはできない状況にあった。観衆のブーイングを納めようと委員長が壘審を呼び説得したが、ほとんど結果点は変わらず、ブーイングは当該選手の心遣いで何とかおさまった。このブーイングの背景にはギリシャの報道が下地になっていたような気がする。

3. 問題解決と体操競技の理解に

このように述べると、おそらく読者は、なんと不正確な判断を、なんと主観的な、なんと不公平な、といった感想を持つことだろう。

今回、ここに取り上げたトラブルの特徴は、体操競技に関わっている人々によるものではなく、NOC、報道関係が関わった抗議だったことだ。体操競技は競技として始まって以来、「何を行ったか」、「出来映えはどうだったか」という判定を下すのに、機械に頼ることができず、人間の判断に頼るしかない状況にあるスポーツなのだ。歴史を振り返れば、激しい抗議で試合全部をだめにしたことが何度もあった。ビデオテープの導入、抗議を有料にする、審判の数を増す、などなどいろんな方策で対応してきたが、いずれもうまくいかなかった歴史がある。感情が先行した抗議騒動はしこりを残し、互いに抗争すればするほど自分たちで体操競技を壊してしまうことになるということに達着した。そんなスポーツはやめてしまえばいい、というスポーツ関係者もいるが、体操のおもしろさや素晴らしさもあることは事実だ。

権利という観点からは有無を言わせない裁断は非人道的だが、長い歴史の中で、選手・コーチ側と判定する側で対立することの不毛さを感じてきた経緯があり、今の競技規則(採点規則の上位規

則)から抗議権が消えていることは確かだ。選手・コーチ側と判定側の間に暗黙裏の理解があったはずだが、関係者以外が参入することによって、また、この理解関係が崩れてしまった。

審判する側は、ある選手が普段いくら能力があるのかを知っていたとしても、試合で目の前で行われた演技を評価しなければならず、選手は、試合では人の助けを借りず、一人で演技を実施しなければならない。そんなことは当たり前と言われるかもしれないが、演技を実施する方も、判定する方も人間だということが重要なのだ。

選手はどれだけ練習を積んでも試合という場面は一つであり、失敗したらやり直しはきかない。審判も精一杯訓練し、誤審のないように努めているが、人の見る目は機械と違い、いくら努力しても予期できないことが起こりうる。つまり、両者とも人間がなすということは基本的に考慮に入れておかなければならないことなのだ。選手側は誤審されないように練習し、自分の技を仕上げなければならない。審判は逆に、初めて見て分からないようでは困るので、情報を集め、自身で、審判同士で、また現場に足を運んで訓練しなければならない。何度も試合を壊すような抗議騒動を体験してきた体操競技は、競技する側と判定する側の相互の尊敬・理解が大切であり、それが競技を成立させているのを知っていたはずだったのだ。

競技種目によっては「秘密練習」のような形を取るものもあるが、体操競技では最後の仕上げとしては単に隠すのはマイナスになる。なぜなら、人の目で判定されることに対処できなくなる可能性があり、トラブルの本になるからだ。1960年から1964年当時、技の開発競争が激しかった頃、日本のチームは海外遠征の際、審判に理解してもらうということを目標の一つに入れていた。今回、日本のチームの優勝について陰口、噂のたぐいがなく、非常にきれいな勝ち方だったと感じるのは、人間が審判するということに対する備えがあったからこそだったと感じている。体操競技は審判能力開発にも、選手の作戦・戦略の部分にも努力が必要になり、相互の信頼関係も必要になる。

選手・コーチの努力、ならびに、審判員の能力向上努力は当然のこととし、スポーツ競技ルールとして抗議権の時間的限界設定を明確にする必要はあろう。また、観衆・聴衆には、体操競技は量的計測競技や純粹芸術とは異なり、時間的にも文

化的にも制約された中で行われる人の判定によるものであることを理解してもらう必要がある。今後ここにあげたトラブルがどのように展開するのか分からないが、スポーツ競技が競技場で決着を付けるといった、いわば場外乱闘は避けなければならない。